

博 士 学 位 論 文

内 容 の 要 旨 及 び
審 査 結 果 の 要 旨

第 4 集

平 成 22 年 6 月

大 手 前 大 学

は し が き

本冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、平成 22 年 3 月 20 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した「博第〇号」は学位規則第 4 条第 1 項によるもの（いわゆる課程博士）である。

目次に記載の報告番号は学位規則第 12 条によるもの（文部科学省への報告番号）である。

目 次

| 学位記番号 [報告番号] | 学位 | 氏名 | 論文題目 | 頁 |
|----------------------|---------|---|-------------------------------|---|
| 博第 4 号 [甲第 4 号] | 博士 (文学) | <small>あかまつ</small> 赤松 <small>わか</small> 和佳 | 西日本における土器・陶磁器の諸様相 | 1 |
| 博第 5 号 [甲第 5 号] | 博士 (文学) | <small>ガーダー ムリン</small> 嘎 达 牧 林 | 「閑適」思想と官僚生活 —白居易の閑適詩と菅原道真— | 7 |

| | |
|---------|---|
| 氏名 | あか まつ わ か 赤 松 和 佳 |
| 学位の種類 | 博士（文学） |
| 学位記番号 | 博第4号 |
| 学位授与年月日 | 平成22年3月20日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻名 | 文学研究科 比較文化専攻 |
| 学位論文題目 | 西日本における土器・陶磁器の諸様相 |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 櫃本 誠一 (副査) 教授 岡 佳子 (副査) 佐賀県立九州陶磁文化館 特別学芸顧問 大橋 康二 |

論文内容の要旨

考古学的な土器・陶磁器研究は、各遺跡での遺物変遷が中心で、広域的・多角的に行われていない。それは遺物量が莫大であることと、産地や器形が複雑で、分類する際に膨大な時間を要するため、編年研究が進んでいる産地のみを取り上げる例が多い。しかし、出土したすべての遺物を取り上げ、それを広域的・多角的に比較しなければ、遺跡・遺構・遺物の特徴を見出せない。

第1章 西日本における土器・陶磁器の出土状況

まず統一した分析方法を策定した。これまで多くの研究者が分類および分析方法を発表されたが、地方に限定された産地・器種、広域に出土しない器種を省く場合があった。本分類はそれらも含めて西日本の遺跡で共通する分類基準を設けた。また、肥前陶器・肥前磁器は生産地で型式編年が樹立されているため、細かい器形分類をすることにより、その組成変化から遺構年代を特定した。さらに、施釉陶器・磁器の装飾を分類し、それらの組成から出土地点の陶磁器受容や地域性を掴むことができると考え、これらも分類基準の一つとして加えた。

その方法によって近畿の近世遺跡41ヶ所をはじめとして、四国・中国・九州北部の近世遺跡20ヶ所から出土した土器・陶磁器の計測分析を試みた。それをもとに産地別組成・用途別組成を作成し、その状況を地域ごとに検討を加えた。

第2章 近畿における土器・陶磁器の様相

近畿の近世遺跡の分析結果から、都市型遺跡（Ⅰ類型）、城下町型遺跡（Ⅱ類型）、在郷町型遺跡（Ⅲ類型）、集落型遺跡（Ⅳ類型）の4類型に分類できると考えた。

これらの特徴は、都市型遺跡（Ⅰ）は、器種の変化や新器種の出現については早く変化し、高級品・嗜好品の比率が他の類型遺跡より高いものであった。また、都市型遺跡（Ⅰ）は遺跡内に高級品の受容差があり、その様相は江戸時代を通して継続した。それが17世紀後期～18世紀前期に至ると、城下町型遺跡（Ⅱ）、在郷町型遺跡（Ⅲ）は産地別組成、用途別組成の比率に大差がなくなり、類似点もみられ始める。また、在郷町型遺跡（Ⅲ）内で高級品の受容差が現れる。遺跡内での受容差は都市型遺跡（Ⅰ）にもあるが、高級品の比率・品質の特徴から城下町型遺跡（Ⅱ）と共通する地点がみられる。したがって本時期に在郷町型遺跡（Ⅲ）内に城下町型遺跡（Ⅱ）の様相を示す地点が現れることが認められた。18世紀後期～19世紀前期に至ると、先の3類型遺跡で受容量は異なるが、産地・新器種の出現に時期差がなくなる。さらに高級品・嗜好品の受容差も都市型遺跡（Ⅰ）では突出して高い比率を示す例はあるが、それを省くと3類型遺跡では類似しており、本時期には土器・陶磁器様相に大差がなくなることが指摘できる。

このようにⅠ・Ⅱ・Ⅲ類型遺跡が変化していく中で、集落型遺跡（Ⅳ）は一貫して先の3類型遺跡とは産地別組成、用途別組成は異なり、特に高級品・嗜好品の受容量は大差があり、共通性が少ないことが明らかとなった。では、近畿以外の四国・中国・九州北部の様相はどうか。

第3章 四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相

計測分析してみると城下町型遺跡（Ⅱ類型）、城下町型遺跡（Ⅱ-2類型）、集落型遺跡（Ⅳ類型）、集落型遺跡（Ⅳ-2類型）、貿易都市型遺跡（Ⅴ類型）の5類型遺跡に分かれる。これらのうち城下町型遺跡（Ⅱ-2）、集落型遺跡（Ⅳ-2）、貿易都市型遺跡（Ⅴ類型）は近畿ではみられない。また、それら3類型遺跡が江戸時代を通して四国・中国・九州北部で多く点在しており、近畿とは異なる土器・陶磁器様相を示す。

これら近畿ではみられない3類型遺跡について、貿易都市型遺跡（Ⅴ）は江戸時代の唯一の海外貿易の窓口であった長崎が属し、貿易陶磁器の量比及び器種組成が他の類型遺跡とは大きく異なる様相を示していた。城下町型遺跡（Ⅱ-2）や集落型遺跡（Ⅳ-2）については、近畿にみられる同類型と比べると、貿易陶磁器の比率が低いこと、新器種の変化に時期差がみられるなどの様相差が把握された。そうしたなかで近畿に存在する類型が出現する。それは17世紀後期～18世紀前期の城下町型遺跡（Ⅱ）、18世紀後期～19世紀前期の集落型遺跡（Ⅳ）である。特に集落型遺跡（Ⅳ）が西日本において、18世紀後期以降に急激に増加することが明らかとなった。

このように西日本の近世遺跡の土器・陶磁器の様相は7類型にわかれることが想定できる。

第4章 近世土器・陶磁器の流通状況について

近世の土器と陶磁器は流通が異なる。土器は、その器形及び成形方法から分布圏を検討し、その結果、陶磁器より小規模な流通圏を形成していた。一方、陶磁器の流通は①広域流通品、②中規模域流通品、③小規模域流通品、④嗜好流通品、⑤内容物流通品と、5類型に分かれる。

その分布状況から16世紀末～17世紀前期は、広域流通品を中心とした流通が西日本に展開

される。その一方で、丹波焼、上野・高取焼など小規模域流通品が産地周辺に流通する。それが17世紀中期以降、中規模域・小規模域流通品がその市場を独占しはじめる。また、広域流通品は肥前陶器・肥前磁器のみとなり、前代に広域流通品であった備前焼や瀬戸美濃陶器は中規模域・小規模域流通品に変わる。17世紀後期～18世紀前期に至ると、肥前陶器・肥前磁器が引き続き広域に流通するが、中規模・小規模域流通品が各地で中心となり、その市場を確保するため多くの器種を生産し、流通圏を広げていく。その傾向は18世紀後期～19世紀前期でも継承され、産地数もさらに増える。このように広域・中規模域・小規模域流通品が各地で活発に流通するなかで、嗜好流通品については16世紀末～17世紀前期の「桃山陶器」をはじめ、貿易陶磁器などは江戸時代を通してみられる。内容物流通は保命酒の備前焼徳利や小倉名物三官飴の清水焼壺などの容器として、本来の流通圏を越えて18世紀後期以降に急速にみられる。

以上のように西日本の陶磁器の流通は5類型に分かれ、その変化が窺えた。それは生産地での技術的改良により安定して生産することが可能となり、近在産の製品で受容が満たされたことが大きい。しかし、その一方で近在にない製品は遠方から流入することは、江戸時代を通して存続した。

では流入した陶磁器はどのように受容されるのであろうか。

第5章 近世陶磁器からみる西日本の受容

一都市への土器・陶磁器受容を兵庫津遺跡から検討した。遺跡内の数地点を産地・用途別組成から比較検討すると、組成に大差はなく、あるのは経済格差である。このことから流通は居住者の身分や経済力に関係なく行われるが、経済力の高い屋敷では高級食膳具や嗜好品を早期に多く受容する。ただ、その受容差も18世紀後期迄であり、18世紀後期以降、その差幅は縮まることが判明した。

経済格差による受容は、18世紀末～19世紀代に出土するヨーロッパ磁器からも窺える。18世紀末～19世紀前期では高級品の一つとして武家屋敷や豪商屋敷などで受容される。鎖国時代、外国製品は貴重であったことはいうまでもない。しかし、この時期、ヨーロッパではマイセンやセーヴルなどの磁器製品が存在したが、これらは王朝や貴族の専用品のため流通せず、銅版転写された量産品が主に世界各地に流通した。日本には肥前磁器という最高級磁器を生産する製品がありながら、このような量産品を高級品として受容する。それはそこに転写された西洋絵画が新鮮であり興味がもたれたためである。それが幕末から明治初頭に至ると、開国の影響によるものであろうか、武家屋敷や豪商屋敷はもちろんのこと地方の町屋に至るまで、ヨーロッパ磁器が受容される。

経済格差による陶磁器受容がある一方で、異なる受容がみられる。広島藩大坂蔵屋敷では蔵屋敷のある大坂城下町跡はもちろんのこと、近畿で僅かしか出土しない砥部焼碗が大量に出土し、これに共伴して広島産の焙烙が出土することから、日用品は国元から持ち込まれたと考えられる。蔵屋敷のある大都市大坂で陶磁器は容易に購入できたと思えるが、このようなあり方がみられたのは蔵屋敷という特質もある。蔵役人は、国元から1年もしくは2・3年交代で派遣されることが多く、広島藩の場合は2・3年交代で派遣され、短期間であるためか単身で来

る場合が多い。そのため日用品などは藩から支給された可能性が高いと考えられる。このような広島藩大坂蔵屋敷での砥部焼碗の出土状況は、江戸時代の陶磁器受容のあり方の一例を示すことができた。

近世土器・陶磁器の多くは生活道具であり、それらの一つ一つは当時のさまざまな情報の手掛りを与えてくれる。また、土器・陶磁器は、他の材質の出土遺物と比べると残存状態もよく、識別もしやすいため同じ基準での比較が可能である。

今回、統一した分類基準を基に土器・陶磁器を分析し、主に産地別組成・用途別組成を比較検討し、西日本の土器・陶磁器の諸様相を論じた。これらの様相は多くの研究者が論じられているものの、あくまで一部の資料を不統一な分析によつての展開である。

そういう意味で本論の試みは、西日本の遺跡で対応できる土器・陶磁器の分析方法を考案したとともに、その方法によつて基礎的な西日本の土器・陶磁器の様相を如実に示し得たと考える。

審 査 結 果 の 要 旨

本論文は本文 294 頁（1 頁 1,200 字）と 11 枚の分類表および 312 個の分析表・実測図等によって、西日本における近世土器・陶磁器の受容を検討したものである。

その検討は統一基準を設けて、西日本各地の遺跡出土陶磁器を一々、産地別組成、用途別組成の点で分析し、それをもとに遺跡の類型化をしたことで地域や遺跡の性格の違いを明らかにした。土器・陶磁器を使った近世史の研究を進めるための方法論を作り上げた点で評価できる。また、西日本各地の 60 遺跡から出土した膨大な陶磁器に関して、実際に調査を行いその成果を網羅したことも評価できる。

一方、一部に論証が荒く論旨が明確でない点も認められる。しかしながら、これまで果たされていなかった遺跡の類型化が設定され、地域や遺跡の有する歴史的な違いを明らかにした点で、博士論文の合格水準に達していると判断される。

| | | |
|---------|----------------------------|---------|
| 氏名 | ガ- ダ- ム リン 嘎 达 牧 林 | |
| 学位の種類 | 博士（文学） | |
| 学位記番号 | 博第5号 | |
| 学位授与年月日 | 平成22年3月20日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | |
| 研究科・専攻名 | 比較文化研究科 比較文化専攻 | |
| 学位論文題目 | 「閑適」思想と官僚生活 —白居易の閑適詩と菅原道真— | |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 | 川 本 皓 嗣 |
| | (副査) 教授 | 丹 羽 博 之 |
| | (副査) 立命館大学 名誉教授 | 笥 文 生 |

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「白居易の閑適論」と「白居易と菅原道真の人生比較論」の二部で構成する。

第一部「白居易の閑適論」では白居易（七七二—八四六、字は楽天）の官吏になった後の各時代の閑適詩を取り上げて分析し、白居易の独特の人生観の表現である閑適の生き方の形成から完成までの経緯を述べる。先行研究の論を踏まえた上で、白居易の各時代の詩に表れた政治環境と実際の生活を分析し、閑適は白居易にとって、文人官僚としての生き方であり、人生観であることを明らかにすることを目的とする。

白居易の官僚生活においては閑適の意識が存在し、彼の生存環境および政治環境が変化するに従って、精神と欲求も変化した。詩文に表現される閑適の意識は次第に成長して、確固とした人生観になった。

官界での進退に従って変化していく閑適意識のありかたを、四つの段階に分けて論じる。

第一段は、初任官の校書郎時代を扱う。官になって、生活も保証された。彼の精神は安定し、官職と個人生活の現状は共に良好だった。これが閑適の生き方の原点だと思われる。

第二段は、校書郎から行政官に転出した時期を扱う。外的な官僚の社会環境と内的な精神世界が衝突した。行政官になりたかった志と現実が異なり、心身のバランスが崩れた。官職のため思い通りの「兼濟」を達成することができず、また「独善」することも仕事の休暇の時に限られる。白居易にとって「兼濟」と「独善」は彼の官の仕事への意識の両面ではなく、官の仕事は「兼濟」であり、それより休暇は「独善」であることと認識していたのであろう。左拾遺の時は、「兼濟」の志が中心になった。閑適は、公務から身を解放することで「独善」になるこ

とであった。それ故、「兼濟」と「独善」は彼の心身の中ではバランスを取ることができず、精神上も苦しくなった。「兼濟」と「独善」を共に実現し、閑適の生き方を探求していたが、なかなか見つからなかった。白居易の生涯に下邳に退居した時期があり、服喪のため官を解かれたので、官僚としての閑適ではなかったと思う。下邳では悲しく寂しい気持ちを慰めることを「詩酒琴」に求め、「日高眠」も自由であったが、官僚生活での閑適とは異なった。

第三段は、江州に左遷され、彼の精神世界の一面である「兼濟」の志が挫折し、政治への関心が薄くなった時期を扱う。「兼濟」の代わりに、これを補充する新エネルギーを仏教に求めた。しかし、自分の政治観点は「兼濟」を放棄した訳ではなく、官の仕事は越権しないで地位を守るとの観念を樹立した。以前の「兼濟」と「独善」という行動は同化され、官を守ることは家族の幸福な生活を守り、それで兼濟もできるということ意識した。彼の精神世界は「醉吟先生墓誌銘 并序（醉吟先生の墓誌銘 並びに序）」に「外以儒行修其身、中以釈教治其心（外は儒行を以って其の身を修め、中は釈教を以って其の心を治む）」とあるように儒教と仏教の両面を持つ。心身のバランスを平衡させ、自分の内心で調整することに努めた。江州司馬の時から、官として閑適する事を悟り、閑適の生き方が彼の官僚生活に浸透していたと思う。

第四段は、杭州刺史の時代から、官を守るため政争が激しい長安から離れ、地方官や東都洛陽での分司を求め、政争から避けることで政敵もなくなった時期を扱う。高官になり、豪邸を営み、心身の苦しみのない生活をする。ここに閑適の生き方は完成した。この生活が彼の致仕まで続いて、閑適の生き方も次第に深化したのである。致仕した後は、官から全く離れ、自由の身になり、精神も完全に閑適することができた。出勤するため早起きすることはなくなり、それ故に「日高眠」や閑適についての詩句も詠まれなくなった。

「閑適」は白居易しか使っていなかった独特の語であり、「白詩語」の一つになるべきだと思う。またこの「閑適」という詩語も後世に受容された。中国よりは日本での影響が深い。またこれについての研究も日本のほうが早く、広い。この相違については今後の課題としたい。

第二部は「白居易と菅原道真の人生比較論」である。

平安朝の文人官僚である菅原道真（八四五—九〇三）は詩歌に当時の官僚の生活を描いたことで、白居易と近いところがあったが、詩作への追求がそれぞれの環境によって異なったということ論じる。

菅原道真と白居易の出世環境、詩作と文人官僚としての生き方を比較考察する。従来の研究では、菅原道真は『白氏文集』の詩語詩句、詩風を模倣したという観点が中心であった。しかし、本論では従来の研究とやや異なる論点を展開する。

菅原道真と白居易は文人官僚としての共通点があったが、政治環境が異なり、詩作の内容および作った場面、または詩を詠う意識が異なったことで、詩作への追求が異なり、詩語詩句の表現がそれぞれ異なった。

白居易と菅原道真の人生を以下の七つの面から比較する。①生まれた家庭環境や受けた教育社会情勢、②政治制度、③官へと登り詰めた道筋、④新進官僚時代の政治環境、⑤白居易の江州へ左遷された後と菅原道真の讃岐へ転出された後の意識の変遷、⑥白居易は長安へ、菅原道

真は平安京へ戻った後の官僚社会での進退、⑦晩年の運命という面である。

白居易と菅原道真は詩文を通して各自の政治観、人生観を打ち出し、同じく文人官僚であったが人生の歩む道が異なり、詩作への追求が異なった。

平安朝の政治舞台に「宮廷詩人」として活躍していた菅原道真にとって、宮廷の公宴で発表する詩は美辞麗句に飾られた表現でなくてはならなかった。白居易は閑適の生き方を大切に、平穏な生活を平易な詩語で詠った。菅原道真は政争の中に身を置き、また宮廷詩人として輝き、美辞麗句の詩を作り、王朝の栄華を詠った。白居易の白俗といわれるような平易の詩風は菅原道真の詩を作る場面とはあまり合わず、華麗な詩風が最も適当であったのである。菅原道真の宮廷詩は白居易の詩と距離をおいて、菅原道真は白居易の詩を模倣することを意識的に避け、自分の詩風を作り出すため努力したという結論を導き出した。

それ故、白居易と菅原道真の詩風には相違も認められる。

審 査 結 果 の 要 旨

本論文は「白居易の閑適論」と、あわせて「白居易と菅原道真の人生比較論」を扱うもので、全体は二部から成っている。

第一部では、白居易の文学、人生観の特徴の一つを「閑適」と捉え、その萌芽から晩年に到るまでの作品を分析した。第二部では、白居易と菅原道真の人生と文学の比較を行い、その相違を二人が育った環境などに求めた。本論文の意義としては、

- ①「閑適」という語は白居易が最初に使用した独特の詩語であることを指摘した
- ②「日高眠」や「知足」という表現に着目しながら、白居易の「閑適」に傾斜していく過程を分析した
- ③ 官僚としての浮き沈みを経験する中で、「兼濟」と「独善」という相矛盾する生き方に迷い、試行錯誤を重ねながら、やがては「閑適」を求める方向に傾いていったことを、段階を追って明らかにした
- ④「閑適」の語は、後代の日中の作品に認められ、特に、平安時代の詩人によく使用されるが、日中両国での「閑適」の受容の仕方が異なることを指摘した

といった諸点が挙げられる。

総合的にみて、博士論文に値すると判断できる。